
step

友

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

step

【Nコード】

N8469A

【作者名】

友

【あらすじ】

初瀬美華高校2年、名前が女みてえという以外別に悩みもなく過
ごしてきたが、……いきなりの引越、行った先はメチャクチャ
くたびれてるし、しかも初日から変な女に会うし……全く、神様は
一体俺にどんな恨みがあんだっての？

第一節

時が止まったような錆色の町は、夕暮れが似合ってしょうがないね。セピア調の画面演出でもすりゃハリウッド顔負けだぜ、きつと。

「ハア…なにが悲しくてこんな街に引越さなきゃならんのだ？ 全く。」初瀬美華（17）学生。今まで名前が女みたいという1点を除き別に悩みもなく暮らしていた俺にこんな災難が待ち受けているなぞ誰が想像しようか？

というが無理があるだろ？ 高2で引越してどうよ？ 年頃じゃん。彼女とかどうすんの？ いないけどさ。

まあ、こういう時はあれだな、現実逃避。引きこもりだ！

「ハア…それはやだな、やっぱし。」

「…かなんで引越すことになったのかというところ…。」

一週間前美華宅夕食中

「そういえば父さん昇進が決まってな、来週から本社に行くことになったんだ。」

「へえ、そりゃよかった。」

「だから来週までに荷物をまとめとくように。」

「ああ。…ってちよい待てや！」

「どうした？」

「んで俺が荷物をまとめんといかん？ 一人でいきやいいだろ？ なんならお袋も連れてっていいよ。」

「それだとおまえが生活できないだろ？ おまえの世話をしてくれるような娘さんがいれば話は別だが…。」

「ぐっ……………」

「…ということで来週までに荷物をまとめておくように。」

で、今に至る。

「…………ハア、溜息オブザイヤーとかいう部門作ってくんねえかな。」

「まあ絶対作ってくんないだろうがな。」

「……………帰ろ……………ついでに三点リーダーオブザイヤーも欲しいな。」

「っーかあれだよな、んなこともつとはやく言えつての、マジありえ痛てっ！んだオイッ！って紙飛行機？俺様に攻撃するなんざいい度胸じゃねえか。」

独り言を連発しながら空を見上げる、お巡りさんがいたら間違いく職務質問だとかいうコメントは受け付けません。

俺の頭上には塔？らしきものがそびえ立っている、全長は10メートルを超えるだろう。その隅の方に何かがはためいている。

ちなみに俺の視力は2.0、はためいているものがスカートだということを確認することにさして時間はかからなかった。

えーっと、色は…じゃなくて、自殺？この紙飛行機は遺書ですか？待て待て待て。

どうして俺はこう不幸なんだ？神様は俺に恨みでもあんのか？まあんなことは置いといて……。

「はやまんなー！！生きてりゃいいことあるから！！」

ありったけの大声を出したつもりだが、彼女は聞こえてないようでまだ紙飛行機を投じている。

「敷島爆撃特攻隊、青木三等空兵、突艦いたします！」

とでも副音声を入れたいくらの飛びっぷりだ。

現実逃避はこのくらいにしてどうすればいいのか考えよう。

シンプルに塔に登って止めるか？いや、登るまでに飛び降りたらアウトだ。下手すりゃ加害者にされる。どうする？もう塔の前の広場

は紙飛行機で埋め尽くされてる……そうだ！その手があった。おれ
って頭いい！

靴で地面に文字を書く、はやまるな……じゃだめだ、入りきらん。
ここはシンブルに……。

「はやまるなー！！」

デカデカと書かれた死ぬなという字をバックにもう一度叫ぶ。

今度は気づいたらしくこつちを向いた。が、俺の目は彼女が首を傾
げたのを見逃さなかった。

「くっそ、バカ女が。今日はぜってえ厄日だ。」

愚痴をこぼしつつ地面を蹴る。こうなったら首根っこひつつかんで
引きずり降ろすしかない。

階段を一段とばして駆けあがる、無駄に段数が多い。

「ゼエゼエ、制作者誰だ？こつちは急いでんだよ、もっと登りやす
くしろや。」

足を酷使し何とか一番上まで登りきった頃には汗まみれだった。息
も絶え絶え正面の扉を開ける。

「こんばんは。」

女の子が笑ってた。肩まで掛かる黒い髪にセーラー服が映えてイカ
すぜ（死語）。

「ああ、こんばんは……じゃなくて。はやまん！生きてりゃいいこ
とあるから、俺も最近やなこと続きだけどさあ、真面目に。だから
死のうとか思うなつての。」

必死で説得する、多分ここまで必死になったのは学校の文化祭で女
装をするという企画を拒否したとき以来だ。

しかし俺の説得は彼女に全く通じなかったらしく、首を傾げてしば
らくした後あまつさえ笑いだした。

なんですかこの人？危ない人ですか？電波受信しちゃった人ですか
？俺の中で疑問符スパイラルが発生し、エマージェンシーコールが
幾度も繰り返される。

「クスクス、ごめんなさい。そう見えちゃいましたか？」

そろそろ頭の中で第三次世界大戦勃発というころ、彼女が驚きの新事実を口に始めた。どうやら自殺というのは俺の誤解で、彼女はどうかや紙飛行機を投げるためにここに登っただけで、俺の努力はすべて無意味で、やっぱ彼女は危ない人だということが分かった。

ハハハ、これだから人生っておもしろいよね。

「……じゃあ俺帰るんで、お騒がせしてすみません、それではごゆっくり。」

「さようなら、また会えるといいですね。」

別れ際の彼女の笑顔はかなり綺麗だった。もう二度と会いたくは無いがな。

第二節

不幸なことに幸せなことは、最終的には5分5分の割合になるらしい。

ということとは俺にもそろそろ幸せなときが来てもいいだろう？

今日は登校初日だったのに犬には吠えられるわチャリはパンクするわ道には迷うわ散々だった。ましてや最後にこれだろ？ハハハ、笑っちゃうぜ。

……どうして俺の隣の席にこいつがいるんだ？

「……ハア。」

「溜息なんてついて元気無いですね？」

「いや、別に（てめえのせいだよ）。」

「あつ、ちなみに私初瀬美久っていいいます。よろしくー。」

「ああ、よろしく。……ってちょっと待て、それって本名？」

「はい、一字違いですね。」

「ハハハ、一字違いだな、奇遇だな、全く。」

同姓同名じゃなかったことを感謝しておこう。

「そういえば美華君、教科書持ってますか？」

「ああ、一応。」

鞆から教科書を出す……出す……？

「あれ？確かに入れたはずんだけど……。」

あきらめず鞆を漁っていると、入れた覚えのない紙が出てきた。

「転校初日は教科書を忘れるものだ。父より」

「……ハハハ……ぜってえ殺す。」

……まああれだ、王道だよな、確かに。これで消しゴム落したりして、拾おうとしたら指が触れちゃったりして、お互い

「ごっつ、ごめん」

とか言っちゃってさ、そこからラブストーリーが……っていつの時代だボケが！ナメンのも大概にしるや！

「……ハア。」

全く、溜息をつくともつ年をとるとか言うけど、だとしたら俺はぶつちぎりでギネスにのれるぜ。

「よく溜息つきますねえ、溜息オブザイヤーもらえますよ？」

「いらねえよ、そんなもん。」

いや、この前は欲しかったけどさ。

ちなみに今は国語の授業中で、教卓では白髪のおっさんが訳の分からん文を大げさな言葉遣いで寛大に読み上げていた。

何でそんなとこにアクセントをつける？そこは巻き舌で発音する決まりでもあるのか？国語教師に心の中でツツコミを入れ続ける。つかぜつてえ独身だな、コイツ……。

「あの人って絶対独身ですよね？」

すぐ横から初瀬美久（17）電波系が言った。どうやらコイツと俺の思考回路には同じ部品が多数組み込まれているらしい。

「ああ、多分独身だろうな。まあそれはいい。問題は別にある。」

「ああ、やっぱあそこは銀河鉄道の夜じゃなくて蜜柑ですよー。」

「ちがう、俺は機械の体に興味はないし、今は夏だ。ハウス栽培はお断りだ。」

「……？じゃあなんですか？問題って。」

「顔が近い、もう少し離れてくれ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8469a/>

step

2010年12月12日13時17分発行